九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

即空観評閲『拍案驚奇』について

日下，翠
九州大学

https://hdl.handle.net/2324/16093

出版情報：文学論輯. 39, pp.49-71, 1994-01. 九州大学教養部文学研究会
バージョン：
権利関係：

即空観評閲『拍案驚奇』について

日下　翠

一、はじめに

一九四一年、我が国の日光倫王寺より、完全な四十巻本の『拍案驚奇』（明崇禎元年、尚友堂刊行）が発見されたことは、白話小説研究史上、特筆すべき大事件であった。この発見以前は三十六巻本が流布しているのみであり、四十巻本が実際に存在したかどうかすら議論の対象となっていたからである。

但し、一般の読者にとってはその後もなお、原文を容易に目にすることの困難な状態が続いていた。

一九六六年、李田意校本『拍案驚奇』（香港、友聯出版社）が発行され、ようやく一般の読者も、手軽に完全な四十巻本を目にすることができるようになったのである。序文によれば李田意氏は、一九五五年来日の折、倫王寺の尚友堂刊本、及び広島大学所有の『拍案驚奇』（尚友堂と同版。第二十三巻「大姊（姉）魂游完宿願、小姨病起續前緣」を欠く。『二刻拍案驚奇』印行の後発刊されたものである事は、表紙の題名『拍案驚奇』の上に、横に小さく〝初刻〟の文字が見えることでわかる。）を研究する機会を得、比較校訂した結果、これを出版したということである。氏のていねいな作業は、もとの四十巻

本では欠けていた、第二巻の第十四葉及び第三十五巻の第八葉を、広島大学所有本によって補い、発行したことにもあらわれている。さらに、それ以上に評価すべきことは、原版に付されていた、作者即空観主人自身の評釈[注2]を、もとの形（欄外、或いは行間に印刷されてある）のままで印刷、発行したことである。これには大きな意味がある。

この評釈が作者即空観のものであることは、表紙の題名の右横に、縦に小さく、「即空観評閲出像小説」とあることからも明らかである。中国では小説などに評を書きこむ事は、よく行われる事であり、格別奇とするには足りない。しかし、作者自ら、出版時に作品に評を付け、印刷して出すということは極めてまれといわねばならない。まして、「三言」とは異なり、「二拍」は（原作があるとはいえ）個人による、白話小説史上初の、純粋な創作集である。その作者の評釈が、極めて貴重、極めて興味深いものであることは、言うまでもないであろう。

この点について、李田意氏は既に、氏の論文「拍案驚奇の版本について」（李田意校本『拍案驚奇』所収。原文は英語。）の中で、次のように述べている。

〝これ（『拍案驚奇』をさす）が、尚友堂の原の木版から印刷された、最初のコピーの一つであることは、ほぼ確定的である。その表題のページは、完全なままで残っている。そしてこれは、その本を、即空観が評釈して、さし絵をいれた物語の全集であると述べている。その文章は事実である。なぜならば、本は多くの欄外、或いは行間に書いた評釈を、八十のきれいなさし絵―一つの話に二枚ずつ―と共に含んでいるからである。〟

李田意氏はさらに続けて、後の版本が評釈を削り去ったことを、極めて残念なことであると述べている。出版に際し、この点を指摘し、活字本にも評釈を付して出版した氏の見識は高く評価されるべきであろう。

筆者はかつて、「元雑劇『看銭奴』の演変」[注3]に於いて、『拍案驚奇』第三十五巻「看財奴刁買冤家主（守銭奴が、恨みのとりたて人を買う）」を例にとり、この評釈について論じたことがあった。その時、即空観主人の評釈の性質について、次のように記しておいた。

〝これ以外にも、凌濛初は、不合理に感じたことを、注として残している。…（中略）…先の〝不捨得〟[注4]のくだりでは、作者として、いいわけめいた説明を書き加えた彼が、後の矛盾点については、読者としての疑問をそのまま書きしるしている。つまり、もとの作品については読者、自らの作品については作者という、二つの立場をゆれ動く様子がうかがえて、大そう興味深い。〟

この観点が、他の作品にもあてはまるのかどうか、ここではさらに、他作品の評釈について、検討を加え、具体的にいくつかの例をあげ、改めてこの評釈の価値を強調したいと思う。

二、第十九巻「李公佐巧みに夢中の言を解き、謝小娥智もて船上の盗を擒える」について

この物語は『太平広記』巻四九一の、李公佐作「謝小娥伝」をもとにしており、ストーリーもほぼ同様である。次に、『太平広記』のあらすじを紹介しておこう。

謝小娥は予章の商人の娘。八歳で母を亡くし、段居貞という侠客のもとに嫁いだ。小娥の父は大金持で、婿の段といっしょに船に荷を積み、行商に出ていた。小娥が十四歳になった時、父と夫が家族、召使もろとも盗賊に殺され、金品を奪われるという事件がおこった。小娥も傷を負い、川をただよっていたが、他の船に助け上げられる。それからは乞食をしながら上元県にたどりつき、妙果寺の尼浄悟のもとに身を寄せた。ある夜、小娥の夢に父が現われ、「私を殺したのは車中の猴、門の東の草だ。」と告げた。また二、三日して夫が夢に出、「私を殺したのは、禾の中を走る一日の夫だ。」といった。小娥はその言葉を書きとめ、頭のよい人に解いてもらおうとしたが、誰にも解けなかった。私（李公佐）が元和八年の春、建業に滞在している時、斉物という僧が小娥の話をし、謎のこと

を告げた。私は小娥を呼びよせると、「お前の父と夫を殺した敵の名は申蘭と申春だ」と謎を解いてやった。小娥は泣いて礼をし、着物の裏に敵の名を書き、復讐を誓った。それ以後小娥は男装して世間を渡り歩き、一年あまり後、潯陽郡へ来た時、ある門に下男を求める張り紙があるのを見て入ったところ、申蘭の家であった。それ以後小娥はおとなしく蘭に仕えて信用され、金の出入りまでまかされるようになった。ある日、申春が魚と酒を持って来て宴会を開き、盗賊どもが酔いしれて帰った後も、蘭と春は酔って寝ていた。小娥は刀をぬいて蘭の首を切り、春を部屋にとじこめ、近所の人々を呼んだ。おびただしい贓物を押収した上、小娥は一味数十人の名をすべておぼえていたため、盗賊は全員逮捕され、死刑となった。小娥が郷里へ帰ると、村の豪族たちは争って妻に迎えようとしたが、小娥は髪を落して出家し、後に泗州の開元寺で得度を受けた。私は長安に帰る途中、泗水の善義寺をおとずれたが、その時、得度したての新発意（ぼち）の尼数十人が、頭の剃りあとも青々と、美しい袈裟をまとい、威儀を正して師の尼の両側にならんでいた。その中の一人が私を見て、「一家の仇を討たせて下さった恩人」といって泣く。わけを聞くと、小娥であり、仇を討った一部始終を語った。私は感心し、このように、謎を解くことができたのも、暗々裏に神明の思し召しがあったからだと思った。また善行を知りながら記録しないのは『春秋』の道にもそむく。そこでこの物語を作って善行を表彰することにしたのである。

以上があらすじである。『拍案驚奇』の方も、ストーリーはまったく同じである。但し、小説らしい細かな描写や、講釈師の語り口を模した、よぶんなおしゃべりが入るなど、白話小説らしい粉飾や、引き伸ばしが行われている。

なお、原作では、この物語の最大のポイントは、私（李公佐）による謎解きのくだりであり、このプロットは、小娥と作者である〝私〟とのめぐりあいにつながってゆく。そしてそれは、〝私〟はこうして小娥の仇討の物語を知る

に至り、その志に感じ入ったため、この物語を記録するに至ったのだ、との〝伝奇〟作者としてのアリバイ作りにもつながってゆくのである。しかし、この点については、〝私〟ではなく、〝講釈師〟が物語る（という体裁をとる）『拍案驚奇』では、状況が異なってくるのであり、それは次の事によく現われている。

『拍案驚奇』では、夢に父の幽霊が現われ、仇の名前の謎を告げるくだりに、

〝亡霊[注5]もよけいな事をしてこの謎を作ったものだ。しかし、こうでなければ、小娥の堅い心を見ることはできない。〟

との評が付されている。確かに、わざわざ謎に作って教えずとも、最初から仇の名前を教えてくれたならば、小娥の仇討ちももう少し早く成就したにちがいない。凌濛初も、この点について、納得がゆかなかったらしく、小説ではこの場面に小娥の次のような心中の思いをつけ加えている。

〝小娥は続けて二つの夢を見たので、こう思った。「これは亡霊がまだこの世から消えずにいるため、姿を現わしたのだろう。ただ、どうして、本当の名前をいってはくれずに、この謎の言葉を用いたのかしら。思うに、あの世のことは、軽々しく洩らしてはならないために、こうなさったのだろう。今すでにこの十二字の謎の言葉を手に入れた以上、必ず解くことができるはず。私自身にはわからなくとも、世の中に聡明な人は、きっと少なくないだろう。何としても、そのような人にお願いして、これを解いてもらうようにしなければ。〟

明らかに、ここに見られるのは、自作の小説を、少しでも合理的なものにしたいという作者の立場からの〝いいわけ〟であり、〝説明〟である。

このように、合理的にしたいとの工夫は、小娥が仇とめぐりあうくだりの申蘭の容貌の描写にもみうけられる。

〝ひきゆがんだ怪異な顔、とがった下あごには黄色い鬚が何本か生え、高く突き出た頬骨に、濃い眉、一対のにらみつけるような赤い目、もの言いは虎が吼えるようで、声は空に暴風雨のごとくひびきわたる。歩みは狼が走るにも似、影は千尺の龍が動くかと思われる。遠くに見れば葬式船の悪霊ばらいの巨大人形のよう、近くに見れば山門の仁王かと思われる〟

なんともすさまじい容貌であるが、その上の評に〝これこそ強盗本来の姿である。〔注6〕〟と書いてあるのには苦笑させられる。デフォルメされた、いかにも講釈師のおなじみの語りくちというべきであるが、小娥はびっくり仰天し、「こやつこそが殺人強盗にちがいない。」とさとる。下男に入りこんだ後も注意深くふるまって信用を得、仇を討つ機会をねらうのであるから、この誇張された描写もむだではないわけである。さらに小娥は、申蘭の信用を得た後も、あれこれと心を配り、相手の気に入るようにしむけ、金の出し入れから、主人の留守の間の家の守りまで、まかされるようになるのであるが、あまりにも都合よく相手の信用を得ることについても小説は、

〝申蘭は悪業の報いからか、小娥に会ってからは、ことの外気に入るようになり、また彼が役に立つことを見てとってからは、日ましに親しみの度を加え、かた時もそばを離さぬようになり、何一つとして謝保（小娥のこと）に相談せぬことはなく、何一つとして謝保にまかさぬ事はなく、何一つとして謝保に出し入れをまかさぬ事はないというありさまでした。〟

と語る。また、すべての品物をあつかえるようになったために、小娥は、かつて自分の家のものであった品々を目にとめる。これが盗賊であることへの証拠の品となり、人の出入りもすべてわかっていたため、盗賊一味の一網打尽

へとつながってゆく（ここの評は〝妙用ここに有り〟と短い）。

このくだりは原作にもあるものの、大きなちがいは、原作では、盗賊一味の逮捕は当然、という風に、数行ですんでいるのに対し、小説の方は、申春の確認にも時間をかけ、一味の名前すべてが判明したのも、申蘭たちが神を祭る（評に、〝何の神やら〟とある）際に、謝保（小娥）を呼んで名前を書かせたためという一段をつけ加えるなど、内容の肉づけや、合理性を増すための、さまざまな工夫がなされている。申蘭が謝保を信用し、いつも妻の藺氏と留守番をさせるようになったこと（これは原作にある）についても、

〝説話的よ、お前はまちがっている、小娥はもう男にばけているのであるから、申蘭は、どうして彼のような、独身男を妻と共に家にいさせるようなことがあるだろうか。彼が道ならぬことをしでかしはしまいかと疑わずにいられようか。みなさま、こういう考え方もございます。申蘭は強盗するような奴ですから、財物を重んじはしても、家庭の礼儀などといったことなど、どうして気にかけたりするでしょうか。ましてや、小娥は、心中はかりごとがあるため気をつけており、申蘭は平日から、彼が大そう真面目で、注意深いことは試験ずみであり、とてもそのような心配はないとわかっていました。それで安心して出ていったのでありまして、このことにつきましてはこれまでといたしましょう。〟

との説明がある。凌濛初自身、この部分は少しく納得がゆかなかったのであろう。

原作との大きな違いの一つに、小娥が、盗賊の正体をあばく際の隣人とのやりとりがある。折を見ては近所の人とも仲よくしていた小娥であり、それ故にこそ、彼女が酔った申蘭を刀で殺し、申春を部屋にとじこめ、「誰か、強盗をつかまえるのに力をかして下さい。」と呼んだ時にも、親しい近所の人が出て来、加勢をしてくれるのである。そ

の時のやりとりの上の評にはちゃんと、

〝かねてからのつきあいは無駄ではなかった。〝(注7)

とあって、小娥の周到さを強調している。それはまた、この場面を合理的で、納得のゆくものにしようとの説明でもある。考えてみれば、下男が主人を殺したのに、近所の人が、にわかに下手人の味方をしてくれるのも奇妙な話なのである。

また、こっけいな一段としては、近所の人が申春をしばりあげ、奥へ進んで行くと、申蘭の妻蘭氏が酔った眠りから覚めて驚き、

〝「いつもはよそへ強盗しにゆくのに、今日はなんと、強盗が押し入って来たよ。」〝

と口にする。近所の人はそれを聞いてすぐさま、謝保の言は真実であるとさとるのである。その上の評に、

〝これは家の守り神が霊験あらたかであって、蘭氏にとりついて言ったのである。〝(注8)

とある。なるほど、そうでもなければ、わざわざ口にして言うのは不自然であろう。いささかわざとらしいプロットであって、この評は、作者としてのわざとらしさへの〝いいわけ〝とみなすことができる。

さて、原作とこの小説との一ばん大きなちがいは、役所でのやりとりのシーンである。小娥は近所の人と一しょに、申春ら盗賊一味を潯陽郡の役所へつき出す。小娥は十年前の謝、段二家の者数十人を殺した罪をあばくが、その証拠として、盗品が家の中にあったことをあげるとともに、そもそも父と夫が夢にあらわれて謎の言葉を告げ、それを洪州の李判官(李公佐)が解いてくれたことが、仇を討つきっかけになったことをいう。太守の張公は話をきいて感心し、

〝「なるほど、なるほど、痛快なことだ。李君は、こんなにも頭が良いのか。私はあの方とつきあいがある、このことはまぎれもない真実にちがいない。」〟

といい、小娥の言はますます信用を増すのである。その上の評に〝李公を証拠とするとは得難いことだ〟とある。これほど身分ある人が証人ならば、まちがいない。李公佐の謎ときは、ここで、小娥の言の信用を高めるために、大きな役わりをはたしたことになる。『太平広記』では、謎ときは作者が〝奇を伝える〟ための伏線となっているのに対し、ここでは証拠としての信頼の高さに役立っている。この点、作者の立場の差―〝伝奇〟の記録者にすぎない、という体裁をとる李公佐と、小説の作者として、すべてを知り、すべてを管理し得る万能者の立場をとる、〝創作者〟凌濛初の差が如実に感じられる。『拍案驚奇』の場合、もはや謎ときは中心のプロットではなく、男装して仇討ちをする小娥の物語の中の一つのエピソードにすぎなくなっているのである。

さらに後、小娥が多くの求婚者をしりぞけ、尼となるくだり、小娥が心中、

〝「私は長年、男装して男の中にまじっていたが、これはしかたのないことであった。しかし、もし今嫁入りしたならば、女としての貞節はどこにあるだろう。死んでもそんなことをしてはならない。」〟

と思う部分の上に、〝かくの如き女性は恐らく有夫たること難かるべし〟(注9)との評がある。小娥の強さに対する、いく分恐れにも似た気持が感じとれ、興味深い。確かに、当時とすれば、小娥はあまりにも、意志と〝自我〟を強く持ちすぎた女性であろう。

この巻の評はそれほど多くはない。それでも作者としての〝解釈〟や、新たにつけ加えたプロットの部分への説明

などに、作家凌濛初の創作上の工夫を見てとることができる。〝伝奇〟の記録者から〝小説〟の創作者へ。この変化を、我々はこれらの評釈から確実にみてとることができるのである。

三、第三十八巻「財産をねらう悪どい婿がおいをねたみ実家の血すじを断やすまいと孝女が子をかくすこと」について

この巻の物語は元雑劇の「老生児」をもとにしている。次に、そのあらすじを各折[注10]ごとに紹介しておこう。（テキストは元曲選本による）。

楔子[注11]

劉従善は東平府の人で六十才。妻の李氏は五十八才。娘の引張は二十七才。娘婿の張郎は三十才であった。従善には従道という弟がいて、引孫という子がいたが亡くなった。その妻甯氏はあいよめ同士不仲なため実家に帰り、他家の手つだい仕事をしては、子供の学費をくめんしていた。その甯氏が亡くなり、一人残された引孫は、伯父をたよってやって来た。引孫は二十五才になるが、李氏はその母と不仲だったことからも、引孫につらくあたった。みかねた従善が別に二間の家を買って住まわせようとすると、李氏は一間には驢馬を飼うから一間だけをやれといい、金を二百両やろうとすると、百両だけにしろという。張郎に百両やるよういいつけると、張郎はその百両の中から二十貫ごまかした。引孫がうけとり、門の外で数えてみると八十両しかない。返ってそのことを伯父にいうと、伯父は張郎に問いただした。張郎はかぞえながらこっそり袖の中から二十両を振り落とし、お前がおとしていたのだといってわたした。引孫はもう二度と来るものか、伯母は自分を見くだしてばかりいるが、張郎はどうい

ばっても姓は張であり、自分はどうあっても劉家の子孫だと恨みごとをいいつつ出て行った。従善は財産を娘とおいの引孫とに分与してやろうと考えていた。侍女の小梅は今従善の子を妊娠しているが、金が子供を得る上での業のさわりにならないように手配しておかねばならないと思ったのである。従善は張郎に婿になって十年たち、子供もいないのであるから、今後は家にいっしょに住むようにいい、さらに金を貸した証文を持って来させ、火をつけた。張郎は火の中に手を入れてひったくろうとし、李氏はせっかくためた金をどうしてこんなことをすると文句を言った。従善はこんな証文なぞ何だ、家には十万貫の金がある、半分を張郎に分け、あと半分は李氏が収めておけ、といった。従善はそれから田舎へ数日間行くつもりだと言い、さらに李氏に小梅が妊娠していることを告げ、これは甕(かめ)を借りて酒を醸すようなものだ、酒ができたら、甕を返せばよいように、子供が生まれたらお前のもので、小梅は質に入れようと売ろうとかまわないからな、といった。李氏はわかりましたといい、従善はくれぐれも小梅のことをたのむ、野菜に新しい水をかけるようにいたわってやってくれ、決して熱湯をかけるようなことはしてくれるなといって田舎へ行った。

第一折

張郎は、劉家に子がないため、いずれ財産が手に入るものと思い、婿となったのであるが、今、侍女の小梅が身ごもっており、女の子が生まれたなら半分、男の子が生まれたなら全部、財産を取られると思い、悩んでいた。妻の引張は夫の心を察し、わざと、小梅の方を付けてしまおう、あなたはお母さんに、小梅は逃げてしまったといいなさい、といった。李氏は小梅が逃げたと聞き、夫が田舎で子供が誕生したとのしらせを待ち望んでいるのに、どうしてこういうことになったのか。ひょっとしてお前たちが何かしたのではないかといった。引張は、小梅は自分で出て行ったのだ、私たち二人は何もしていない、といい、李氏はそういう事なら、お前たち二人は私について来

てくれといい、三人で田舎へ行った。従善は田舎で、子供が誕生したとの知らせを待っていたが、下男に、若い時は、商売に一生懸命で、多くの業を積み重ねた、また、小梅が男の子を生んでくれたらどれほどうれしいかを、切々と語った。そこへ李氏たち三人が来、従善は、子供が生まれたものと思い、大喜びするが、小梅が逃げたと聞き、驚く。とても信じられず、一人ずつ三人に聞くが、やはり同じように小梅が逃げたと聞き、失望して、お前のせいだと李氏を罵った。李氏は小梅のかわりに妾を一人もらってはどうかといったが、従善はそんな話はするな、としかり、家から一、二千両の金を持って来い、明日開元寺で、貧民にほどこしをするから、といった。李氏はそんなことをしてもしかたがないと反対したが、従善は、今後は私利を図り、むごい借金の取り立てをするなどはしない、この半世の災いを消すよう努力しよう。天も眼のないことはあるまい、きっといつか良い事がおこるだろう、と言った。

第二折

張郎は従善のいいつけ通り開元寺で乞食に金をほどこしていた。大人は一貫、子供は五百文である。そこへ一人の乞食が、親子連れの乞食とやって来、子供も一戸として金をもらい、その金を二人で分けようといった。子連れの乞食は、子供はわしのものだから、金もわしのものだ、どうしてお前と分ける必要があるのか、といった。そして、子供のない方を「後つぎなしの貧乏人」と罵った。それを聞いた従善は胸のつぶれるような悲しみを味わう。そこへ、引孫が、伯父のくれた百両も使いはたし、破れ窰(がま)の中に住んでいるが、ほどこしの話を聞き、恥をしのんで金をもらいにやって来た。張郎と会うと、張郎は、金はもうない、と追い返そうとした。李氏も引孫が来たと聞き、金をかくしていやみをいうありさま。従善はこれはわしの甥だ、打つのも罵るのもわしがする、と叱りつけた。さらに、どうしたものかと思案したあげく、家のかぎ十三箇を張郎と娘にわたし、家の財産の管理をすべてま

かせるといった。そして、商売をするから、もとでを貸してくれという引孫に、学問をせよと教えさとし、妻の目をぬすんで、くつの中に両錠あるからそれをとれ、しっかりと墓まいりをするのだぞ、一二年もたたぬまに、お前を大金持ちにしてやるからといった。李氏はさんざんに引孫を罵り、引孫は貧乏を嘆きながら、破れ窰の中へと帰って行った。

第三折

張郎は家の財産をまかされて上きげんであった。おりしも清明節のこととて、墓まいりにゆくのに、いつもは劉の家の墓まいりをしてから張の家の方へ行くのであるが、今年は自分の家の方へ先に行こうと考えた。引張は反対したが、張郎が、お前はおれに嫁いだのだから張の墓にはいる、やはり張家の墓にまいろうといわれ、それに従った。一方引孫は従善のいいつけを守り、劉家の墓まいりをしていた。一個の饅頭をそなえ、少しの酒をそなえ、紙銭を裂いた後、おさがりの酒を温めて飲もうと、鍬をその場において立ち去った。そのあとへ従善夫婦が来たが、墓に誰かがまいったあとはあるものの、娘夫婦も誰も姿はみえない。しかたなく、二人で、次々に先祖の墓を拝んでまわった。さらに、自分たちはどこに葬られるのかという話になった時、従善はこの地には葬られず、あの荒地に埋められるであろうといった。李氏は、娘がいるではないかと反論したが、従善はわざと私の姓は何だとたずねた。李氏が劉だというと、お前の姓は何だといった。李だと答えると、李の家の者が劉の家に来て何をしているとたずねた。きちんと結納をかわして嫁いだのだといい、今では劉の奥さんだといった。従善はそこで娘は将来劉の墓に入るのか、張の墓に入るのかと尋ねると、李氏はようやく気づいて、後つぎのないのはなんと情ないことかと嘆いた。そこへ引孫が鍬をとりにもどって来た。李氏は引孫をみると、どうして家にご飯を食べに来ないのかとやさしく声をかけた。引孫はまたぶたれるのかとおびえたが、李氏は従善に、劉家のぼっちゃんが来ましたよと告げ

た。従善は引孫にわざとなんくせをつけ、お前の両親も葬られている先祖代々の墓を祭るのにけちなおそなえをしよって、と怒り、打ちすえた。李氏はあわてて夫の手をとめ、この子はお金がないのですから、とかばった。従善がさらに、お前はなぜあの、烏も飛びこせぬほど大きなやしきの、石の羊や虎のある墓へまいらぬのか、というと、李氏は、おじいさん、あなたはまちがっていますよ、あれは誰のものともわからぬ墓です、この子が私ら劉家の墓へ来なくてどうしますか、といった。従善がさらに、引孫が劉家の子孫なのか、娘夫婦が劉家の子孫なのか、わしは知らぬというと、李氏はようやく、自分の非をみとめ、これからは引孫を家に住まわせ、一切のめんどうをみることにするといった。そこへ娘夫婦が来たが、李氏は、今ごろ何をしに来たとなぐりかかった。従善がなだめると李氏は、娘夫婦にわざと、どうしてそんな粗末な服を着て来たのか、かぎを貸しなさい、もっとよい服を取って来てやろうといい、かぎを取りもどすと、そっくり引孫にわたし、これからはお前が家の管理をしなさいといった。引孫は有頂天になり、張郎に「貧乏人、あっちへ行け」と、かつていわれた言葉を言い返し、劉家へと帰っていった。

第四折

従善が自分の誕生祝いと、ついでに引孫に家をまかせることになった祝いの宴を開いていると、張郎夫婦が祝いにやって来た。従善は「あいつらに、誰の家の金を使い、誰の家の墓まいりにいったのか尋ねて来い。」といい、家に入れようとはしなかった。引孫に出てゆかせ、自分と同じような近親者ならば入れてやるといわせると、引張は小梅に子供をつれて来るようにいった。小梅と子供を見て従善は驚き、三年もどこへ行っていたのかと問いただした。引張はそこで、張郎が小梅を亡きものにしようといっていたので、あとつぎを断やさぬためにかくまって子を生ませ、三年間めんどうを見ていたのだとうちあけた。従善は知らなかったと娘にわび、引張は子供ができたか

らといって、娘のことを忘れないで下さいなといった。引孫は子供ができた以上、かぎは返しますといったが、従善は三人はみな身うちだから、と、財産を三つに分け、娘と甥と息子に分けることにした。そして、むだに財産をほどこしたわけではなかった、天はこの年よりに息子をさずけて下さった、と感謝した。

以上が雑劇のあらすじである。小説もほとんど同じであるが、いくつか凌濛初が変えた点がみられる。注目されるのは以下の各点である。

1、張郎はあとつぎがいないことを承知で婿に入った、財産めあての悪人であり、李氏と甥の引孫の仲をさくよう画策し、わざと引孫の悪口をいう。李氏がことさら引孫につめたくあたるのはそのためであるとする。

2、娘の名を引姐と変えている。引姐は、夫に、小梅を亡き者にしようと相談をもちかけられ、小梅をかたづければ、父の血を断やすことになり、不孝者となるから、そのようなことはできない。しかし、話にのらねば張郎はかってに手を下すだろうと思い、わざと承知する。この心理や、小梅を助けるてだてを考えるくだりが、詳しく語られる。

3、引姐は小梅と相談、はっきりとわけを話し、かくれて子を産む計画の一部始終を小梅に話す。小梅は状況をよく理解した上で、引姐の保護をうける。引姐の聡明さがよく描かれる。

4、従善夫婦が引孫に財産の管理をまかせた後の、張郎夫婦の会話で、引姐は、実の弟に財産をとられるならまだしも、引孫にとられるのはしゃくだから、何かてだてをこうじよう、と言う。はじめ引姐は、夫に気づかれるとまずい、と考え、小梅の子供がもう少し大きくなるのを待つつもりでいたのだが、引孫が財産を手に入れたのをみて不満に思い、早く子供を連れて来ることに決めるのである。ここでの引姐は実家の財産も考えに入れて行動する、単に父親の為を思う孝行娘とは違う姿をみせている。この方が、合理的であり、納得がゆくのかもしれないが、反

面、人物像にしたたかさが加わってみえる。

5、最後の所ではっきりと、従善が財を散じて陰徳をほどこしたからこそ後継ぎができ、また、娘と甥との、身内に財産を分けてやったからこそ、みなが力をあわせて家を守っていったのであると書き、恩を施した報いを受けたという点を強調している。

さて、評についてであるが、従善が李氏に向い、〝甕を借りて酒を醸す。〟という話をし、小梅の腹を借りて後継ぎを得ようとするくだりの上に、

〝女ども[注12]は、ただもう酒を醸すことを許そうとせぬばかりで、酒の有無など、どうしてかまおうか〟

とある。

さらに、張郎が小梅を亡きものにせんとはかるくだり、小説はこうなっている。

〝「やつ（従善をさす）は明らかに、おれがこっそり小梅をかたづけるつもりだと疑っているんだ。むやみに善人のふりをした所でなんにもならない。やつが田舎にいるのをさいわい、本当にやってしまって、後の憂いを無くしてやろう。」〟

このせりふは、小説が新たに加えたものであるが、その上の評に、

〝悪人[注13]はいつも、先づ、人のあやまちのまきぞえをくったようなふりをする（人のせいにしたがるものだ）。〟

とある。悪人の心のうごきを説明したこの評とあいまって、張郎の心の揺れをよく表わした見事な心理描写といえる。またその後、小梅が逃げたことを聞いた時の李氏の言葉（この言葉は戯曲と同じ）

〝「あの人はこんな年になって、子供ができるという望みがあるからこそ、大へんな喜びようで、田舎でうれしい知らせを待っていらっしゃるんですよ。どうしてこんなことになったんだね？もしやおまえたち二人が何か悪いことをしでかしたんじゃないかい？」〟

この上に、

〝母親[注14]は本来は良心を持っており、教化できぬ者ではない。ただ愛に溺れただけである。〟

とある。確かに、李氏は小梅と子供に対しても何らの殺意も抱いてはいない。子供がいなくなってよかったという気持はこのくだりからも感じられない。ただ、甥より娘夫婦がかわいかっただけなのである。

また、墓地で、従善が李氏に、お前の姓は李なのに、どうして劉家の家にいるのか、と問いつめるくだり、小説も戯曲同様、相当にしつこいやりとりが行われる。その上の評に、

〝一言一言[注15]からかいながら、道理をつきつめてゆく。論法にすぐれたものといえるであろう。〟

とある。たしかに、くどいぐらいに念を押しながらたたみかけてゆく言い方が、ついには李氏の心を百八十度転換させるのであり、このくだりは一つの山場といえる。その李氏が心を入れかえ、甥の引孫に財産の管理をまかせるくだりの、

〝「今からは、ただ劉家の者だけが家の管理をするのです」〟

という言葉の上に、

〝義理[注16]の勇が自発的に出たのである。愉快、愉快。〟

とある。そして最後の大団円の場面。誕生日の祝いに来た娘夫婦を、従善は家へは入れさせず、引孫は劉家の者だと認めるが、娘は張家の者である、引孫ほどに近い劉家の肉親が来たならば、入れてやりもしようし、引孫にまかせた財産もとりもどせるかもしれないが、という。この幾分唐突な設定は、子供をつれて来る為の伏線ともいえる。引姐はそこへ、誰よりも近い劉家の肉親である従善の子、自分の弟を、小梅に連れて来させるのである。小梅が、「お嬢様のおかげで無事でおりました。」という上に、

〝小梅(注17)こそがうごかぬ証拠である。〟

とあり、さらに続けて、

〝娘(注18)がたまたま賢くて、劉家の者として認められるかどうかわからぬのに、劉家の者を護ったにすぎない。世間の娘と婿には、心をあわせ、父親の財産をねらう者が多いのである。〟

とある。この物語が珍しい美談であることを強調しているのである。

以上あげた評からはそれぞれ、心理描写のたくみさや、批評の的確さなど、作者の創作者としての水準の高さを知ることができる。作品とあわせて読んだ場合、(作者自身がさし示す〝見どころ〟に、大いに啓発されるのは当然とはいえ)明代の文人と〝共感〟できることに快い興奮を覚えるであろう。

四、その他の作品の評釈について

次に、断片的ながら、幾つか目についた興味深い評釈について紹介してみたい。

(a) **第一巻、運の無い男が洞庭紅にめぐりあい、ペルシア人が鼈竜の殻を指摘すること。**

第一巻のこの物語は、我が国でも訳[注19]が出ていることもあり、わりあいよく知られた物語といえよう。『拍案驚奇』では、ほとんどの物語は、導入部に短い「入話」を紹介し、その後に、それと内容の関連した「正話」を物語るという構成になっている。この話の入話は、老人が一生懸命ためた銀が、息子たちに分け与えようとしたとたんに他の家へ去ってしまうという話であり、運や縁が無ければ、金は去り、その逆に、運がむいて来たならば、労せずとも大金がころがりこんでくるという内容になっている。

正話の方も、これと同様のテーマで、何をやってもうまくゆかなかった不運な男が、みかん一かごをもって航海に出たところ、大きな亀の殻を偶然拾い、それがもとで莫大な財産を手に入れるという物語である。そのポイントである、大亀の殻を拾うくだりはこうである。

〃私は海外へ来てから、一つも海外の品物を手に入れていない。今からこれ（大亀の殻）を持ってゆけば、珍らしいものではあるし、人に見せたら、でたらめをいって蘇州人はほらふきだなどといわれなくてもすむだろう。また、鋸で開いて、底とふたの二枚にし、それぞれ四つの足をつければ、二台の寝台ができる。なんと面白いことだ。〃

その行の横に、

〃こんなかわった思いつき[注20]（奇想）、蘇州人でなければできまい。〃

とある。凌濛初は浙江烏程の人。いづれにしてもこの物語は、船乗りシンドバッドにも比べられる、中国には珍しい海外冒険譚であるが、富を求めて海外に雄飛した南方人ならではのものであったことがよくわかる。この〃奇想〃

が主人公に莫大な富をもたらすのである。

(b) **第二十四巻、「塩官の邑で、老魔が色に魅いられ、今骸山で大士が邪を誅すること。」の入話について。**

この巻は、入話、正話ともに神威により悪の報いを受ける物語となっている。入話では観音閣という寺の僧が、旅人を殺して金を奪い、その死体を切りきざんで甕の中に入れておくが、それが露見、一網打尽になる話が語られる。その悪事が露見するくだりの評を見てみよう。

旅人が殺されたその夜、江を巡る警備隊の指揮官が、一人の美しい女性が桶に水をくみ、寺門へ入ってゆくのを見る。指揮官は、寺内にどうして美人が水を担ぐのか、きっと僧らがけしからぬことをしているにちがいない、といい、兵をつれて寺内を捜索する。かの美女は甕の中に消え、その中の旅人の死体が発見されて僧らの罪はあばかれるのであるが、その美人の後を追うくだりに、

〃美人でなければ、あとを追わなかったかもしれない。〃(注21)

と評がある。この美女は観世音菩薩の霊顕であると思われるが、不美人であったならば指揮官も後を追わず、あたら菩薩の霊顕もあだとなったかもしれないわけである。このくだり、いかにも楽しんで評を書いている、作者の様子が目にうかぶようである。

(c) **第二十八巻、「金光洞の主が旧蹟を語り、玉虚洞の尊者が前身を語る。」の正話について。**

この巻の正話は、玉虚洞の尊者が人の世に生まれ変わり、馮京としてくらすが、五十年後、小童に導かれて仙境に至り、金光洞の主に昔の事を聞いて前身を思い出すという話である。その、仙境に遊ぶくだり、すばらしい景色や、建築をながめ、さまざまに感心しながら歩いた後のこと。一休みしようと腰をおろしていると、いきなりすさまじい

吼え声がし、つむじ風が起こって一匹の巨獣が出て来、馮京の肝をつぶさせるのであるが、そこの評に、

〃ここで驚いておかねば、ただよい所ばかりでは起伏が少なすぎる。〃(注22)

とある。

ここは完全に作者としての、創作の裏ばなし的な評となっており、面白い。単なる読者の立場では、このような評はまず出て来ないであろう。

五、まとめ

以上、いくつかの評釈を紹介してきたが、他にも興味深いものはあり、これらはその中の一部にすぎない。しかし、紹介したものの内容からも、この評釈の大体の性質は理解できたことと思う。

まず、目につく特徴は、作者の、いかにも創作を楽しんでいるといった風な、のびやかな遊び心である。我々はここに、明人の、完全に娯楽として小説を楽しむ姿に、改めて気づかされるのである。

それまでの伝奇・戯曲と異なり、ここには明らかに、余暇を楽しむための、暇つぶしの娯楽読み物、エンターテインメントを作ろうとする姿がうかがえる。

また、この評釈の、凌濛初の作者としての〃説明〃と、読者としての、読み所を指摘した批評部分からは、あらためて彼のすぐれた才能を知ることができるであろう。

さらに、この評釈の大きな価値は、明人の、フィクションを自由に楽しむ姿に、当時すでに娯楽作品を創る作者と、それを出版する出版人、金を払って買い、楽しむ読者という、今日でいう作者と読者が存在していたことを証明できる点にあると思われるのである。

注

（注1）　即空観主人が淩濛初を指すことは既に証明ずみとみなされる。一九四七年葉徳均氏が「淩濛初事蹟繫年」を発表している。「烏程県志」（光緒刊）には、「淩濛初、字は元房。初成と号す。廸知の子。帰安の籍。崇禎中、副貢を以て上海の丞を授けられ、海防の事を署す。塩場の積弊を清む。擢んでられて徐州に判たり。」とある。

（注2）　評というよりは、注釈、解釈に近いものもあるため、便宜上評釈という言葉を使うこととする。

（注3）　「水門―言葉と歴史」（一九八五年一月十五日　水門の会　第一四〇号）所収。

（注4）　あることをするに忍びない、という意味。作品では、「屋敷をつくるのに、材木やレンガ、瓦などを買うのが惜しく、その寺院をとりこわして用いました」というくだり、及び、「（科挙の試験を受けに行くのに）妻が若く子が幼いため、残してゆくにしのびず、相談して三人で一しょにゆくことにしました。」というくだりの二個所の〝不捨得〟の上に、それぞれ〝この不捨得の念がまさしく、困窮のもとなのだ〟〝この不捨得もまた然り〟との評が付されている。

（注5）　原文は、亡霊多事作此謎語然非此無以見小娥之堅心。

（注6）　原文は、是個強盗真容。

（注7）　原文は、従前之結交豈徒然哉。

（注8）　原文は、此養家神道有霊而附繭氏言之也。

（注9）　原文は、如此女人恐亦難有夫。

（注10）　折とは、一つの套曲を中心とした一段のことである。

（注11）　〝楔子〟とは、くさびの如くうちこまれた臨時の曲を指す言葉であったが、ここでは便宜上、元曲選本が〝楔子〟と表記している一段落のこととしておく。

（注12）　原文は、女眷只不許與人釀那管酒之有無。

（注13）　原文は、悪人做作每每先坐人不是。

（注14）　原文は、媽媽原有良心非不可化誨者但溺于愛耳。

（注15）　原文は、句句挑逗直窮到底可謂善于説法者。

（注16）　原文は、義理之勇出于自発快哉快哉。

（注17）　原文は、小梅是大證見。

（注18）　原文は、女児偶賢未可認劉只護劉也。世間女與婿同心而謀翁産者多矣。

（注19）　題は「幸運児」。「世界短篇傑作全集」（河出書房　昭和十一年）所収　増田渉訳。

（注20）　原文は、奇想非蘇州人不能。

（注21）原文は、不美則未必追逐。
（注22）原文は、須此一驚不然只是住處便少起伏。